昭和43年用 (昭和43年9月末現在)

東 京 工 業 大 学

窯業同窓会会員名簿

付 会 誌 第 9 号

窯 業 同 窓 会

東 京 都 目 黒 区 大 岡 山 1 番 地

東 京 工 業 大 学
境 野 照 雄 気付

電話 726-1111 振替口座 東京 196855 番

御　挨　拶

河　嶋　千　尋

昭和4年4月，大学の創設とともに青春の夢を抱いて窯業専攻を志し，恩師近藤清治博士の初代助手として赴任してから昨年3月末をもって定年退官するまで，37年余の久しい才月にわたって在職致しました私は，昨年4月には名誉教授また，10月には窯業に関する新技術（ラバープレス法による粉体成形）の発明によって計らずも紫綬褒章を授賞，菊花薫る宮中において陛下から今後とも科学技術の発展に努力するようにとのお言葉を 賜わる感激に浴しました。

このような身に余る栄誉は大学研究室の方々のこれまでの献身的な御助力によるものでございますが，平素学外からも御激励と御支援を寄せられました業界，学界の先輩，知友並びに窯業同窓会の皆様方の御庇護によることが極めて大きいことを痛感致し，これまでの御厚情に対して心からの御礼を申し上げる次第でございます。

さらに私の退官に当りましては記念事業会を企画下され，皆様から多大の御配慮に預かりましたこと，秋色濃き八芳園 において全国から多数の方々の御臨席を仰いで，あのような盛大な祝宴をお開き下さいましたことは私の終世忘れえない想い出として，まざまざと胸中深く刻みこまれております。

私の工大在職30数年間にわたる学究生活を顧りみますと，あの戦時中の数々の苦難とともに戦後の世をあげての混乱から逸早く立なおった窯業界の戦災復興と輸出産業の振興を対象とした国内地下資源の開発と未利用資源の適正利用の研究，学内における業制の改革による学科制の廃止，研究所の統合整理と窯業研究所，工業技術員養成所，専門部の設置と改廃などによる工業教育および研究者としての悩み，さらに山内前学長を中心とした無機材料工学の研究体制の確立に対して情熱をかたむけた当時のこと，また工材研所長および学内の研究常置制委員長としての最後の御奉公のことなどが，まるで走馬灯のように限りなく脳裡に想起されます。

最近の米ソを中心とする宇宙開発の急速な発展による国際的な高度産業の発展と共にセラミックスの分野は電子工学，核エネルギー工学の応用分野にも次第に脚光を浴びるに至りましたが，とくに学問的には材料物性を中心とする窯業基礎　の学問的進歩は理学と工学にまたがった　材料工学としての境界領域の未知分野の開発へと進み，ニューセラミックスの研究開発と技術革新の夢は今日もなお無限に拡がっている現状でございます。

私は昨年4月から武蔵野の面影をのこした桦並木に囲まれた静かな吉祥寺の成蹊学園内の工学部（工業化学科）の一隅にあって，引きつづいて学生の教育と研究に連日多忙に過しております。成蹊大学の名の起こりは『桃李不言下自成蹊』 に由来したものでありますが，三菱の創始者岩崎小弥太氏の私財の寄附によって設立されてからすでに50数年の永い伝統と現在では，小学，中学，高校および大学（学部および修士課程）をもった綜合の学園にまで大きく発展しておりますが，国立大学と比較にならぬ私大研究費の貧困と研究要員の不足に悩みながらも，昨今の私は無機材料工学研究室の新設によって工業技術者の育成と産学協同の研究業績の実をあげるべく日夜努力を続けている現在でございます。

ここに会誌を通じて平素の御無沙汰を御託び旁々これまでの御厚情に対して心から謝意を申し上げるとともに，さらに今後共絶えない皆様の御支援を期待して一筆御礼に代えさせて頂きたいと思います。

退 官 に 際 し て

森 谷 太 郎

昭和41年3月をもって定年退職をいたしました。昭和7年3月本学の第1回卒業生として学び，卒業後本学助手として田端耕造先生のもとに研究生活に入ったものでありますが，当時立派な先生方がおられ，研究をするにも心が引締まる思いがいたしました。私にとりまして，この助手時代が最も楽しかったと今でも思っております。

常に若い生き生きとした学生諸君と共に語り，実験し，時には人生観について論じ合い，「人としての責任感」や「若人の情熱」の大切なことなどについて話し合ったことは忘れ得ぬ思い出であります。これらの学生諸君は，今はいずれも斯界の最高責任者の地位で活躍されておられることを思うと嬉しい限りであります。

昭和14年12月，なつかしい助手生活にわかれ国際電気通信株式会社技術研究所に入り，電気材料の研究に従事することになりましたが，その間本学に窯業研究所が設立され，同所の嘱託を拝命いたしました。

その後山内先生の御尽力によりまして，終戦直後本学教授として再びなつかしい母校に帰って参りました。

終戦後大学における教育も大きな転換を余儀なくされ，旧制から新制へ，新課程による大学院設置と進んできましたが，それにも増して学生気質も年々変遷してきますので，それに対処して教育して行くことのむつかしさを感じながら何年かを過してきたのであります。昭和37年10月に工業材料研究所長を併任し，昭和41年3月定年退官いたした次第です。

退官後は東京理科大学理工学部に奉職し，引続き教育研究に従事することになりましたが，教育という仕事の重大さとむつかしさを思いますと，私の任ではないように思われます。

特に人間教育は常にその時代に即応して自信のある教育を行なうべきだと思うのでありますが，自分自身の弱さが痛感されてなりません。

しかしこれからはいっそう勇気を出して学生と接し，謙虚な気持をもって次代を担う人物の育成に禍のないよう努めたいと思っておりますので，今後ともいっそう同窓の皆様ならびに先輩の方々の御指導と御鞭韃を仰ぐ次第でございます。これにて退官の御挨拶に代えさせていただきたいと思います。

42年度総会における記念授与

記念品贈呈に対する礼状

拝啓　陽春の候窯業同窓会の皆様には益々御健祥に渉らせられ大慶に存上げます。
さて此の度は卒業50年の記念として思ひもよらない結構な電気スタンドを御贈与に預り感激の至りに存じます。皆様の御厚意に対し幾重にもお礼申上げます。永く家宝として御厚情を忍びたいと存じます。
先は乍略儀書中を以て御礼申上げます。　敬　具
昭和41年4月25日
柴　田　周　逸

拝啓　此度は「卒業50周年記念」として誠に結構な御品を御送与賜りまして有り難く厚く御礼申し上げます。常時愛用しまして，当時回想の記念品と致す所存で御座います。丁度，今春，当地新聞社の主催する「金婚夫婦祝福表彰式」にも参列しましたような次第で御座いまして重ね重ね一層嬉しく存じております。
右不取敢略儀失礼ながら御礼の御挨拶申し上げます。　敬　具
昭和41年4月27日
川　口　敏　夫

拝啓　陽春の好機となりました。窯業同窓会幹部の御方々には益々御健勝にて御活躍の事と御悦び申上ます。扨て此度は私等の卒業50周年の記念として結構なる美術硝子器御恵送下され感謝に堪えません。厚く御礼申上げます。一つには硝子工芸品の著しい進歩を顕すものとして永く愛用致し度いと思います。
先は右取敢えず御礼申述べ感謝の意を表します。　敬　具
昭和41年5月5日
木　村　一　男

拝啓　御会益々御隆昌の事お慶び申上げます。陳者今回は記念品御郵送下さいましてありがとう御座いました。深謝申上げます。私事不在中のためすぐ入手御礼状差出さず遅延致しました事をお詫び申上げ，謹而御礼申上げます。
乍延引御礼まで御挨拶申上げます。　不　一
昭和41年5月17日
吉　見　恒　雄

拝呈　小生今般卒業後50年に相当致しますに就まして，貴会から誠に結構な記念品の御恵贈に預り有り難く御受け致しました。御厚志厚く御礼申上げます。
不取敢御礼まで。　早　々
昭和42年5月14日
華　房　嘉　勝

拝啓　今回貴会に於かれては小生蔵前卒業50周年を記念として美事なる華入を御恵与下され御芳志有りがたく厚く御礼申上げます。著名なる御品今後は貴重なる記念品として末長く楽しみに使はせて戴く心組でおります。小生平素は御無沙汰のみ申上げ失礼いたしております。お詫び申上げます。
先は乍失礼紙上にて厚く御礼申上げます。　敬　具
昭和42年5月15日
小　田　野　勝　男

拝啓　初夏の候御会には益々の御隆盛慶賀申し上ます。
此度私等卒業して50年を記念して戴き立派なる名工の作品を御送附賜り忝なく拝受しました。御懇篤

なる御心尽し難有厚く御礼申し上げます。
　唯世の中に何んの為す処もなく永く生を得度のみ御恥しき次第で御座いますが，今後多少なりとも期業のために御役に立てばと努め度存じます。
　御会の一層の御発展を祈り，先づは御礼まで申上ます。　　敬　具
　　昭和42年5月18日
　　原　　幾　久

****

受賞会員報告その他褒章事項

（窯業協会誌1965年10月号から1967年10月号迄に記載されたもの）

○石塚正信氏（石塚硝子社長）黄綬褒章
○境野照雄氏（東京工業大学教授）「ガラスの着色に関する研究」により窯業協会 論文賞を受賞
○田賀井秀夫氏（東京工業大学教授，工業材料研究所　所長）「塩基性耐火物に関する研究」により窯業協会論文賞を受賞
○長崎準一氏（日本電気硝子株式会社，取締役）「結晶化ガラスの製造技術の確立」により窯業協会技術賞を受賞
○鈴木弘茂氏（東京工業大学助教授）「炭素，炭化珪素系耐熱材料における最近の進歩」により，窯業協会論文賞を受賞
○稲村　泰氏（黒崎窯業株式会社）「珪石煉瓦の技術的変遷」により窯業協会技術賞を受賞
○東京芝浦電気株式会社電気硝子事業部　第13回大河内賞，生産賞を受賞
○鮎川武雄氏（東洋陶器株式会社社長）勲三等旭日中綬章を受賞
○田代　仁氏（京大化研教授）鷹　木　清氏（日本電気硝子技術部長）日本商工会議所会頭賞を受賞
○河嶋千尋氏（東工大名誉教授，成蹊大学工学部教授）紫綬褒章を受章
○森谷太郎氏（東工大名誉教授，東京理科大学工学部教授）藍綬褒章を受章

****

先輩浮洲武彦氏を悼む

水野 茂樹*

　明治44年7月，東京高等工業学校窯業科出身の東芝炉材株式会社社友浮洲武彦氏が去る7月20日，79才の天寿を全うして逝去された。
　同氏は，私の学校での大先輩であり，また，私が東京工業大学窯業学科を終えて，社界人として始めて東洋耐火煉瓦会社に入社した時の上長であり，以来30有余年の薫陶を受けた恩人である。
　浮洲さんは，旧会津若松藩士の御出身で，あの古武士の面影を宿した謹厳な人格者であったが，これは蔵前在学当時，隅田川のボートで鍛えられたあの逞しい風格によっていっそう磨かれていたのではないだろうか。私共の会社が今日あるのは，東洋耐火煉瓦の創業者大野一造氏（東京高等工業･窯業科明治41年卒，刈谷市名誉市民として，工業都市刈谷の興隆に貢献され，昭和42年3月逝去された）の苦心もさることながら，第一次世界大戦後，不況時の大正11年以来，営々として40有余年にわたり，一貫して“品質第一主義”の経営に徹し，優れた製品の開発に努力された氏の功績によるものとみたい。特に高アルミナ質耐火物については，その原料の開発とそれによる多くの優れた製品は，わが国の鉄鋼業，窯業，化学工業方面に大きな貢献をしてきたことは，衆目の一致するところと思う。
　また，古くから社団法人窯業協会，耐火煉瓦協会，耐火物技術協会あるいは日本学術振興会等各団体の要職を歴任され，わが国耐火物工業に学･業を通じて大きく寄与されたことも銘記したいことである。浮洲さんの奥さんは数年前に他界されたが，5男2女の息女も既にそれぞれ家庭の人となられ，13人のお孫さんに囲まれる楽しい御家庭であったが，思いがけぬ訃音に接し，ひとしを淋しい思いをしたのは，

私のみで はないであろう。心から御冥福を祈る次第である。

なお，同氏の御功績に対して，7月20日付で正六位勲五等双光旭日章を賜わったことはありがたい次第，併せてご報告を申し上げたい。

＊（窯業学科昭和10年3月卒，東芝炉材株式会社）

****

昭和41年度総会と懇親会

昭和41年度の総会ならびに懇親会が昭和41年4月27日，東京神田駿ケ台の山の上ホテルで開催された。

総会は午後5時30分，近藤常任幹事の司会で開催され，大野会長が挨拶した後，庶務関係の会務報告を境野常任幹事が行ない，会計関係を宇田川常任幹事が報告し，承認された。

ついで卒業50年にあたられる大正5年卒業の加藤薫氏，上山節氏，川口敏夫氏，各務鉱三氏，木村一男氏，城島守人氏，中西誠次郎氏，浜田象二氏，堀口順康氏，吉見恒雄氏，柴田周逸氏の11名の方々に記念品が贈呈され，各務鉱三氏の代表としての謝辞があり，満場から祝福の拍手が贈られた。

その後田賀井教授の学内近況報告，山内副会長の挨拶があり総会は終了した。

総会に引き続き約80名の参加を得て，境野，宗宮の両常任幹事の司会で懇親会が開催された。恒例の藤岡先輩の乾杯で始められ，倉田副会長の挨拶などそれぞれの分野で活躍されている多くの方々のテーブルスピーチがあり，盛会であった。

****

昭和40年度収支決算報告書

収入の部		支出の部	
収入総額	572,931円	支出総額	445,970円
内訳		内訳	
前年度繰越金	72,133円	総会・懇親会費	94,690円
事業寄附 金	105,900円	卒業50年記念品代（9名）	27,000円
名簿広告料	315,000円	総会・懇親会通信費	16,121円
懇親会費（53名）	79,500円	名簿印刷発行費	302,205円
預金 利子	398円	雑支出（振替為替手数料）	5,950円
		差引残高（明年度繰越金）	126,961円

以上報告致します。

昭和41年4月27日

窯業同窓会　会計幹事

昭和42年度総会と懇親会

昭和42年度の総会ならびに懇親会が4月21日（金）ホテル･ニュー･ナゴヤで開催された。

午後5時30分，宗宮常任幹事の司会により総会が開始され，大野会長の挨拶の後に会務報告に移り，庶務関係を近藤常任幹事，会計関係を宇田川常任幹事がそれぞれ報告した。

続いて卒業50年の大正6年卒の方々，鮎川武雄，赤塚幹也，岩崎嘉助，榎本修二，小田野勝男，木船要太郎，戸田哲次郎，原幾久，華房嘉勝，安田晋三，吉田九郎の諸氏に加藤鈔氏作の蒼釉花器が贈られ，岩崎嘉助氏，木船要太郎氏が代表として挨拶された。

さらに学内近況を境野常任幹事が，学外近況を山内副会長がそれぞれ述べて，総会は終了した。

懇親会は地元名古屋の方々のお骨折で，出席者約100名，松本秀夫氏の司会で盛大に開催された。

藤岡先輩の乾杯につづき，各地で活躍の方々、旧教官，現教官の挨拶があり，なごやかに進行した。地元野口長次氏のスピーチは，窯業の長年の伝統心をふるいおこさせるよいスピーチであった。

昭和41年度収支決算報告書

収入の部		支出の部	
収入総額	260,481円	支出総額	210,382円
内訳		内訳	
前年度繰越金	126,961円	昭和41年度総会･懇親会費	156,457円
事業寄附金	24,900円	卒業50年記念品代（9名）	32,430円
昭和41年度懇親会費（63名）	107,100円	昭和42年度総会･懇親会通信費	21,100円
預金利子	1,520円	雑支出（振替為替手数料）	395円
		差引残高（明年度繰越金）	50,099円

以上報告致します。
昭和42年4月21日

窯業同窓会会計幹事

****

事業寄附者芳名

（敬称略，順不同）

昭和40年度

300円

吉沢篤二郎	小巻卓司	中辻正信	荒井秀
堅田尚	山沢逸雄	俵余志夫	中村義夫
前沢秀憲	友田正雄	松崎錠三	草場知喜
水上義介	波多野宏文	今間朋春	原和照
金子豊彦	宮入英彦	井出善弥	吉田吉三
佐藤純夫	古海宏一	渡辺一行	中村周清
海老昱雄	北村友太郎	清水尚	大矢真吾
吉川俊吾	中川邦好	加藤博之	井形勉
寺門常次	橋本享	増田稔	開田高生
下平高次郎	御代健次郎	立花寛一	速水多根雄
福沢福七	木村多喜雄	加藤欽一郎	田代楠熊

	雨宮 正	深田 義	西田 一雄	内藤 隆三
	池ノ上 典	逸見 英一	伊藤 正三	田代 仁
	桜井 宜隆	池田 卯一	久富 豊実	森川 鉄之助
	後藤 一夫	川口 敏夫	中里 米太郎	芝原 雅弥
	佐藤 保雄	米谷 忠次郎	斉藤 鶴義	中村 能一
	鵜野 太郎	高宮 陽一	柳 正光	岩切 一良
	大村 心也	塩田 政利	安田 晋三	鮎川 武雄
	滝沢 一貴	山本 広	毛利 良雄	奥川 恭平
	近藤 保	桑山 政武	山本 登	木村 一男
	山内 祐次	足立 保彦	中村 藤一郎	中村 三千夫
	田辺 昌之	辻 晋六	浮洲 武彦	山形 安一
	牧村 信之	村上 光一	藤井 透	水地 満穂
	色川 秀男	清末 義和	巽 昭夫	矢島 一治男
	江副 勇馬	田中 貞夫	和泉 正光	
400円	田中 満生	勝田 恵一		
500円	国吉 五六	長崎 勧	小林 力	五十川 克己
	柘植 信雄	日浦 致	各務 鉱三	桑山 則彦
	相原 公敏	樋口 松之助	日笠 泰行	西尾 登志夫
	佐藤 友利	森谷 太郎	川村 新太郎	石川久羅四郎
	稲村 泰	佐野川 健	中尾 竹次郎	新居 善三郎
	岡本 十郎	中村 敦	藤岡 幸二	佐沢 光夫
	長谷 正義	内山 浩	大木 通胤	藤井 豊男
	菊地 光治	山本 孝彰	中村 厚	奥田 進
	藤井 正雄	北川 信吉	伊藤 亮	新井 博之
	丹羽 誠	中川 順吉	尾野 幹也	浅田 敬徳
	石井 鉄弥	越前谷 民雄	川畑 健雄	原 幾久
	川村 久爾彦	古志野 稔	伊藤 登	長崎 準一
	久保 季吉	山口 静逸	桑原 直輝	茂木 今朝吉
	梅原 一正	高原 一郎	村瀬 六郎	山室 忠臣
	柴山 景介	境野 照雄		
600円	梅田 夏雄			
1,000円	鈴木 保雄	野上 敏一	真保 義郎	十時 一雄
	美崎 敬之	稲生 謙次	名和 二郎	坂本 誠吾
	森 元邦	飯塚 誠厚	吉田 格	佐々木 茂弐
	坂田 正	横瀬 信次	田上 嘉秋	森本 孝治
	溝上 登一	坂東 文市	木船 要太郎	島村 弘之
	安竹 了和	藤田 芳夫	石井 峯郎	小坂 丈予
	山内 俊吉	市塚 恵之助	小泉 善三郎	
2,000円	中山 一郎	綿谷 政次郎	福井 哲	
3,000円	星野 武司			
10,000円	宮川 愛太郎			

昭和41年度

300円	横溝 政太郎	斉藤 勝一	梅田 夏雄	河嶋 千尋
	倉田 貢	境野 照雄	名取 賢荘	浜野 健也
	真保 義郎	漆戸 秀守	河原田 次剛	宇田川 重和
	河井 信雄	小島 豊之進	宗宮 重行	西田 一雄
	桧山 真平	山下 透	井上 昭	赤尾 洋二
	太田 千里	木船 要太郎	高橋 久男	野上 敏一
	藤岡 幸二			
500円	斉藤 進六	佐多 敏之	鈴木 弘茂	渋谷 益男
600円	安竹 了和			

800円　近藤連一
1,000円 田賀井秀夫　野口長次　菊地　央　“匿名氏”
2,000円 鈴木保雄
3,000円 山内俊吉
5,000円 倉田元治

昭和42年度（昭和42年9月末現在）
500円　境野照雄　宇田川重和
1,000円 市塚　年　河嶋千尋　田賀井秀夫　宮里　務
2,000円 木船要太郎　岩崎嘉助

なお大野政吉，倉田元治，山田精吾の諸氏からは同窓会懇親会ごとにビールの御寄贈を預いている。

****

昭和40年度東海支部総会，見学会，懇親会

昭和40年10月29日午後，名古屋を出発し石塚硝子岩倉工場を見学，さらに犬山の途中にある新名所「明治村」を見物した。

夕方，午後6時より名鉄犬山ホテルを会場にして総会及び懇親会を開いた。会には東工大田賀井先生も参加され，盛会裡に午後8時頃ごろ会を閉じた。（足立保彦）

****

昭和41年度東海支部総会，見学会，懇親会

昭和41年10月28日，名古屋工業技術試験所で総会，見学会が開催された。午後1時30分所長，鹿取一男氏の挨拶があり，“同窓会が試験所を見学されるというような事業をされることで，挨拶をするのは，自分としては始めてである。如何に窯業同窓会会員が技術の向上に前向の姿勢でいるかに深く感心した”との話があった。

所内見学で特に陶磁器関係者に興味を引いたのは，有機可塑剤研究室における界面活性を利用した粘

結剤，また釉薬研究室における新しい色彩と感覚のもたれる釉薬，伝統のある美しい色の再現方法などが研究されていることであろう。見学された研究は実際面でもすぐ役立ち，さらに技術相談もあるので，現場技術の改善に寄与されることと思われた。

見学と総会後，舞台をかすが荘別館に移し，午後5時より1時間東洋一の岩風呂に入りハダカで歓談した。一方，十時（日碍の重役）囲碁5段と菅原常務（日陶）とは碁を打ち始め，弥次馬も観戦，風呂どころではなかったようである。一同そろったところで記念撮影し，じゅうぶん，腹もすかせた後，宴会に入った。野口支部長の〝人は自分一人の力では，人にはなれないもので，必ず人との邂逅（出会い）によって形成されるものだ。

このように老若席を同じくして大いに語り会い，互に得るところのあることが望まれる。〞との話しに始まり，長老吉田氏（大11)の音頭で乾杯し，大石氏（日陶副社長）の藍綬褒章のお祝もあり，全員のスピーチをもって，なごやかな雰囲気の中に秋の夜はふけ，最後に次期支部長，菅原氏の音頭で窯業同窓会の発展の万才をして，8 時に解散した。

41年度の役員

支部長	野口長次（5）	
副支部長	菅原敏夫（10）	伊藤正三（12）
常任幹事	市原堪治（5）	桧山真平（10）
	水野茂樹（10）	松本秀夫（15）
	加藤政良（16）	船井長治（16）
	奥川恭平（16）	埜崎堅造（18）
	加藤守光（21）	柴田茂（22）
幹事	大河原晋（14）	市村定治（16）
	福堂勇夫（16）	内藤隆三（18）
	篭橋久衛（19）	新居善三郎（20）
	奥田博（21）	加藤鈔（23）
	各務芳樹（25）	福井博（27）

42年度の役員

支部長	菅原敏夫（10）	
副支部長	伊藤正三（12）	桧山真平（10）
幹事	市原堪次（5）	大河原晋（14）

松本秀夫（15）	奥川恭平（16）
福堂勇夫（16）	荻原淳治（17）
上野三郎（18）	内藤隆三（18）
新居善三郎（20）	加藤守光（21）
柴田　茂（22）	利根川　洋（23）
加藤　鈔（23）	紀本礼一郎（23）
伊藤　登（23）	福井　博（27）
中川邦好（28）	田代楠熊（28）
堀江　勲（28）	西尾嘉則（31）
副鳥繁雄（33）	渡辺歆佑（36）

****

「昭和5 ・ 6会」記念クラス会

昭和42年9月14日（木）午後6時頃から東京･高輪の幸楽で会合した。

今日のクラス会は中山一郎氏が日本軽金属の社長に昇進されたことと，長崎勧氏が九州耐火煉瓦社長昇任と紫綬褒章受章の喜びを兼ねた久しぶりの会合で，出席者14名中，前工大学長の山内俊吉先生，富山国之助先生，宮川愛太郎先生の御参加を賜り，錦上華を添えた。

世話役，丹羽氏の進行で年長の宮川先生に次いで，中山，長崎両氏の謝辞後開宴，堅 苦しいことは抜きにして懐旧談はつきず，歓談で時間のたつのが早く，時8過ぎお互いの健康と発展を祈念し又の再会を約して盛会裡に散会した。

出席者	中山一郎	長崎　勧	丹羽　誠
	鈴木重夫	十時一雄	野口長次
	尾関　稲	真保義郎	田代幾太郎
	安芸静一	森井良一	（鈴木記）

訃　　報

下記の方々は前号記載以後御連絡のあった方々です。物故された方々に対して衷心より御冥福を御祈り申し上げます。

永　塚　楽　治	明治40年卒	昭和41年5月歿
大　野　一　造	明治41年卒	昭和42年3月歿
福　田　篤次郎	明治42年卒	昭和40年6月歿
大須賀　真　蔵	明治44年卒	昭和39年7月歿
浮　洲　武　彦	明治44年卒	昭和42年7月歿
河　井　寛次郎	大正3年卒	昭和41年11月歿
安　田　晋　三	大正6年卒	
山　崎　周　吉	大正8年卒	昭和40年11月歿
河　村　吉　三	大正11年卒	昭和42年10月歿
久　富　豊　実	大正13年卒	昭和41年11月歿
松　尾　美　人	大正15年卒	昭和41年10月歿
渋　谷　義　隆	昭和36年卒	昭和41年3月歿

大岡山通信

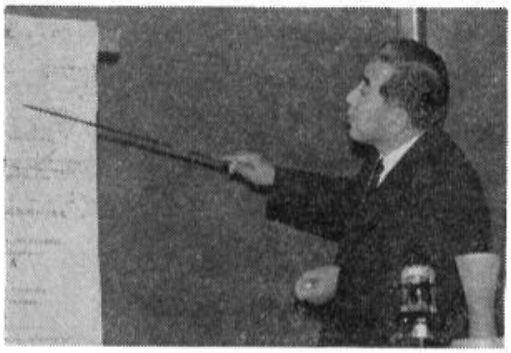
◎河嶋・森谷両教授最終講議

昭和40年3月末日をもって停年退職される河嶋千尋教授（工業材料研究所元所長），森谷太郎教授（工業材料研究所 前所長，無機材料工学科）の最終講議は快晴にめぐまれた昭和41年2月8日午後1時から東京工業大学第305号講議室において開催された。

はじめに田賀井教授が河嶋千尋教授の略歴，感謝の辞を述べ，河嶋教授は「高速飛翔体をめぐるセラミックスの研究開発」と題した最近の諸問題について最終講議をした。次に山田教授が森谷教授の略歴，感謝の辞を述べ「ガラスの構造に対する一考察」と題し過去20ケ年にわたって研究された考察を講議した。

出席者250名で極めて盛大であり出席者に多大の感銘を与えた。

終って自由ケ丘駅前「楼蘭」において懇親会を開催した。境野助教授の司会により，山内先生，末野先生などのスピーチがあり午後8時田賀井教授の挨拶で閉会した。



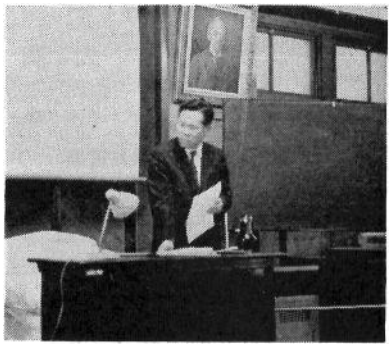
◎第 3 回 Dr. G. Wagner 記念公開学術講演会

昭和40年11月11日午後2時から4時まで，第3回Dr. G. Wagner記念公開学術講演会が母校第一会議室で開催された。森谷太郎教授の挨拶の後，東京大学教授定永両一博士が「X線回折による窯業材料研究の進歩」について，X線装置によって解明された結晶構造上の進歩，マグネシア粒とマトリックス部との関係など，興味深い講演をされた。その後一部の有志は席を自由ケ丘「楼蘭」に移し，定永先生を囲んで懇親会を開き，にぎやかに歓談した。8時頃，話題はつきなかったが解散した。

◎第 4 回 Dr. G. Wagner 記念公開学術講演会

第4回Dr. G. Wagner記念公開学術講演会が今年はちょうど博士の命日にあたる11月8日，東京工業大学第一会議室で開催された。講師は東京工業大学教授（工業材料研究所）佐多敏之氏で，

田賀井工業材料研究所長の挨拶の後に「フランスにおける基礎研究組織と無機材料の研究」と題して約2時間にわたり，フランスの窯業についての基礎研究の現状，その研究機構，特に佐多教授のおられたCNRSについて報告された。



出席者は山内無機材質研究所長（東工大元学長）など約100名で，きわめて盛会であった。

この講演は始め東京大学牧島象二教授にお願いしてあったところ，外国から御帰国なさらないために急に佐多教授にご講演をお願いした。ここに佐多教授ならびに参加して下さった方にお礼申し上げる。

◎学　内　情　報

ここしばらくの間に，いろいろの面で母校も大きな変容をとげようとしています。正門をはいって時計塔の見える正面玄関にむかったとき，左がわにできた新しい近代的なビルディングにまず驚かれるでしょう。これは前から計画されていたとおり，本部の事務系がひとまとめになって入り，学長室もここに移されました。

さらに本館の東側にそって工場地帯に踏みいると，まず右手に6階建の四角いモダンな北棟がそびえ，もっと奥にすすむと，トンネルの手前の両側に，東棟と南棟がならんで，そのあたりの景観をすっかり変えてしまっています。いちばん新しいのは昔の建築材料研究所，つまり，いまの工業材料研究所の向って左手にできた天然物化学研究施設のビルディングで，その一部分は工材研で使っています。

また，目蒲線の反対がわの丘の上には，やはり建設関係の6階だての新校舎が完成しました。これらにつづいて，なお，工場地帯には近く中棟が建設工事にはいります。こう見てくると，さしも広大な大岡山地帯も，いまやまったく過密状態で，これ以上の発展は，おのずから新天地に求めざるをえないでしょう。

実際に，新しい学生寮は多摩川のむこうの高津に完成しましたし，また神奈川県の長津田には5万坪をこえる地域が新しいキャンパスのために用意されました。

「新しい酒は新しい革袋に」の言葉どおり，大学の中味もまた，長い準備期間のあとで，本年（昭和42年）6月を境として，新しい制度――複学部制度に発展しました。つまり，理学部と工学部が発足したわけです。

昔の窯業学科は現在の無機材料工学科によって引きつがれ，また以前の窯業研究所は工業材料研究所に発展しています。

このへんで，全学の新しい組織を見てみましょう。

理学部――数学科，物理学科，化学科，応用物理学科，自然科学，天然物化学研究施設

工学部――金属工学科，繊維工学科，無機材料工学科，化学工学科，合成化学科，高分子工学科，応用電気化学科，印写工学研究施設，機械工学科，生産機械工学科，制御工学科，経営工学科，電気工学科，電子工学科，電子物理工学科，土木工学科，建築学科，社会工学科，図学，教育学，人文科学，社会科学，外国語，保健体育

資源化学研究所
精密工学研究所
工業材料研究所
原子炉工学研究所

さらに，わが無機材料工学関係の教官が配域している組織を詳しく眺めると次のようになっています。

無 機 材 料 工 学 科

（講 座 名）	（教　授）	（助 教 授）	（助　手）	（技　官）
第１講座(珪酸塩物理化学)	川久保	加　藤	太田・五十嵐	出　町
第２講座(焼　　成)	素　木	宇田川	大津賀	中
第３講座(熔　　融)	境　野	—	滝　沢	山　本
地 質 鉱 物 講 座	山　田	小　坂	浦　部	大　場
工　　場	—	—	林	大　矢

工業材料研究所

（部門名）	（教授）	（助教授）	（助手）	（技官）
基礎計測	加藤	浜野	—	—
無機焼成材料	田賀井	近藤	後藤	大沢
無機溶融材料	佐多	—	中村	浦野
超高温材料	斉藤	—	—	吉永
合成無機材料	清浦	—	黒沼・伊藤	上西
化学冶金	佐藤	—	畑野	野口
複合材料物性	後藤	宗宮	佐藤・安藤・名知	鈴木
固体物理	—	竜谷	篠原	上中
工場	—	—	小磯	唯野

原子炉工学研究所

（部門名）	（教授）	（助教授）	（助手）	（技官）
材料	黒田	鈴木	木村	—

おわりに，ここ2年間の人事移動をまとめてご報告します。まず，昭和41年6月，大山前学長のあとをおそって実吉学長が選出されました。その直前，3月には河嶋，森谷両教授が定年退職され，翌月，ともに名誉教授に推されました。その前年の秋，工業材料研究所の所長は森谷教授から田賀井教授に引きつがれています。以下，人事移動をまとめると，つぎのようになります。（境野）

（氏名）	（移動年月と事由）		
佐多敏之	昭和41年4月	教授に昇任	
岩井津一	昭和42年1月	〃	
斉藤進六	〃	〃	
境野照雄	昭和42年2月	〃	
宇田川重和	昭和41年10月	助教授に昇任	
宗宮重行	〃	〃	
加藤誠軌	昭和42年8月	〃	（久保研究室助手）
小坂丈予	〃	〃	
毛利純一	昭和41年7月	〃	（千葉大学工学部へ出向）
瀬高信雄	昭和41年10月	〃	（無機材質研究所へ出向）
林剛	昭和40年4月	助手（工場）	
浦部和順	昭和41年11月	助手（清浦研究室）	
中村哲郎	昭和42年1月	助手（佐多研究室）	
五十嵐幹治	昭和42年4月	助手（川久保研究室）	
楠本吉則	〃	助手（浜野研究室）	
福長脩	昭和41年4月	助手（斉藤研究室）	
〃	昭和42年7月	無機材質研究所へ出向	

◎論文提出による学位授与者

東京工業大学事務ニュースNo. 356号（昭和40年9月15日）からNo. 379号（昭和42年9月15日）迄に記載されているもの。

吉岡　丹　昭40.10.13付工博（東京工業大学工業材料研究所助教授）
「建築物床仕上材料の摩耗に関する研究」

下　平　高次郎　　昭40.10.27付工博（東工大工材研旧職員）
「アルミニウム合金琺瑯用フリット釉に関する研究」
新　居　善三郎　　昭40.10.27付工博（昭20卒）
「窒化チタンの合成とその焼結体に関する基礎的研究

◎補　　遺

原稿を締切ってから，本会会長の受賞が文化の日に次のように発表されました。
　勲三等旭日中綬章　大野　政吉
ここに皆様とともに謹んでお祝い申し上げる次第です。
なお藤岡長老にも今春めでたく受賞されましたが，調査不足により漏らしましたので，ここに追記してお詫び申し上げるとともに，哀心よりお祝い申し上げます。
勲五等瑞宝章　　藤岡　幸二

—— 寄付のおねがい ——

おかげさまで，会の財政も赤字を克服して多少の余裕をもつようになりましたが，例年，名簿を発行したあとは会計も底をつきますので，なるべく多数の皆様からご寄付をおよせ頂きたく，何本よろしくご援助のほどをお願い致します。
金額は1口，500円以上，いくらでも結構でございます。

—— あとがき ——

今回の名簿がお手許にとどくのは，例年よりやや遅れて，あるいは御迷惑をおかけするのではないかと恐縮しております。実は責任者の外国出張が名簿編集の時期と重なってしまったために，原稿を集め，整理する段階ではなはだ時間が延引してしまった次第で，深くお詫び致します。
その他の業務は幸いにして順調にはこび，また会員皆さまのご協力によって，会の経理もこのところ，まったく赤字を脱し，健全な姿に立ち直っております。
ただ，2年の間隔で名簿を発行しておりますと，その間の会員の移動ははなはだ多く，訂正用の名簿が赤インクの書き込みで真っ赤になる状態ですが，この機会に，この繁雑な事務をここ数年にわたって全面的に手伝って頂いている小生の研究室の山本技官にお礼を申し上げるとともに，会員の皆様にも，移動，訂正などについては何卒積極的にご連絡下さるよう，ご協力をお願い申し上げます。

昭和42年12月5日印刷
昭和42年12月10日発行
編集兼発行人　境　野　照　雄
発行所　東京工業大学窯業同窓会
東京都目黒区大岡山
東京工業大学 境野照雄 気付
振替口座　東京　196855
印刷所　株式会社　技　報　堂
印刷者　大　沼　正　吉